

雨ふりもあり山坂もあり

文 小林信翠

詠み人知らずの道歌に

〱 一生は旅の山路と思ふべし平地はすこし峠沢山
とあります。一生のうち、困難の時のほうが長く、
平穏な時は意外に短いものです。
それでも辛抱して歩んでいかなければなりません。

正常性バイアス

オリンピックイヤーの今年。晴れがましく、
期待にあふれた一年になるはずでしたが、現状
はご存じのとおりです。開催自体に暗雲が立ち
込めてきましたが、この先どうなることではし
ょうか。

今回の新型コロナウイルス感染症（COV I
D-19）の問題に関しては、今後さまざまな角
度から検証がなされ、次世代への糧にしてい
くべきであることは間違いありません。ここまで
の感染拡大に「正常性バイアス」が大きく関与
しているという指摘には着目すべきものがあり
ます。

たとえば危険な目にあつた時、人は自分を落
ち着かせようとして「私は大丈夫」と思い込
もうとします。これを社会心理学や災害心理学の

用語で正常性バイアスと言います。新型コロナ
の件に関して言えば、「自分だけはかからない」
という油断こそが、感染拡大につながる最大の
リスク要因ということなのです。

特に現代人は歴史的に見て、極端に危険の少
ない環境に暮らしています。危険に対して敏感
になりすぎると大きなストレスとなるので、普
段から危険を感知する能力を下げようとする適
応機能が働いているというわけです。わかりや
すく言えば「平和ボケ」というところでしょう。

この正常性バイアスの顕著な例が二〇〇三年
二月、韓国の大邱市テグで起きた地下鉄事故です。
辺りには煙が充満しているというのに、なぜか
逃げない乗客一九七人が死亡するという大惨事
となりました。皆、「自分は大丈夫」という根
拠のない信念によって避難が遅れたという悲劇
です。

もちろん、日常的に必要な以上の不安にかられることはしんどいことですが、自動車の運転でいうところの「だろーう運転」より、「かもしれない運転」の方が不慮の災難には対応できるのは当然のこと。そして、実際のところ、私たちの生活には危険や災難がすぐそばで影を潜めていることを忘れてはいけなと、今回の新型コロナウイルス騒動を通じてあらためて感じた次第です。

久安を待むことなかれ

中国の古典『菜根譚』には「久安を待むことなかれ」とあります。順風満帆な時にも、それがいつまでも続くと思うな」という意味です。人は幸せな状態にはすぐに馴れてしまうもの。そんな時に不幸に見舞われるとうろたえてしま

う人間の弱さを戒めているのです。なぜ弱いのか？ それは「無常」という風に振り回されないための確固たる足場がないからです。無常の風は常に吹いています。しかし、それをいつも感じ取り、振り回されないように警戒を怠らないことは、正常性バイアスだらけの私たちには難しいことなのです。ですからせめて、無常の風に吹き飛ばされそうになった時のシェルターを確保しましょう。体勢を立て直し、もう一度立ち向かっていけるための柱を自分の心に作るのです。

八つの風

以前にもご紹介した『八風抄』という日蓮聖人のお書き物の中で、無常の風には八つあると説かれています。

「賢人は八風と申て八のかぜにをかされぬを

賢人と申なり。利、衰、毀、誉、称、譏、苦、楽なり。(乃至)此八風にをかされぬ人をば必天はまほらせ給なり」

現代語訳・賢い人は八つの風に犯されぬものと昔から言われている。八風とは利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽である。(中略)この八つの風に犯されぬ人には諸天の守護がある。

八風それぞれの意味を簡単に挙げますと、

①利(うるおい)・・・金銭的・物質的な利益が思うままになること

②称(たたえ)・・・人から目の前で称えられること

③誉(ほまれ)・・・自分の知らないところで、世間から誉められること

④楽(たのしみ)・・・一時的な快楽に身を任せる

こと

⑤衰(おとろえ)・・・さまざまに損をすること

⑥毀(やぶれ)・・・自分の知らないところで悪評を受けること

⑦譏(そしり)・・・人々から面と向かって悪口を言われること

⑧苦(くるしみ)・・・心身の自由を奪われ苦しむこと

となり、これら八風を大別すると四順と四違とに分けられます。

四順とは①④の四つで、その人にとって好ましく、喜ばしい気持ちになるものであり、誰もが好む誘惑となるものです。一方の四違とは

⑤⑧の四つで、できれば避けたいこと、早く終わってほしいことです。

四順がいつまでも続いてほしいと執着し、四違を忌み嫌い遠ざけるのが人の常。しかし、こ

の姿こそ八風に侵されると日蓮聖人は喝破されたのです。八風が吹いても振り回されない強い信念と使命感を持った本当の賢い人になると教えておられます。

八風に侵されない生き方とは、端的に言えば仏さまのお悟りの結晶体である「南無妙法蓮華經」の御題目を自分の心の中心に据え、そして、なおかつ他の人までこの教えでもって助けようとする生き方です。心の底から人助けを考えられる人になれば、この八風などそれこそどこ吹く風で、グラつかない生き方ができることでしょう。

ご信者Kさん

ご信者のKさん夫妻は入信する前、二十代で会社を立ち上げ、かなりの成功を収めます。

しかし、少し有頂天になっておられたのでしよう。ふとした気の緩みから事業は失敗に転じ、あれよあれよという間に生活は困窮を極めてしまいました。

その後、今度は奥さまが主となり、一から事業を始められます。最初は順調でしたがまたしても行き詰まり、自らの力では限界があると痛感したそうです。そんな時、奥さまのご実家がお参詣され必死になって祈願に励んだところ、不思議なご縁に導かれるかのように経営が好転したのです。しかし、同じ轍を踏む訳には行かないので、油断することなく仏さまにおすがりしながら乗り越えてこられました。

そのおかげで紙面では紹介がたいほど大きなご利益をいただきながら、今も経営は順調すぎるほど順調。とはいえ、そんな時こそ天狗に

なっってはいけないと、お寺参りは欠かせないとおっしゃいます。

全国を飛び回るお仕事ですので、出張先で最寄りのお寺に参詣し、さらには知り合う人ごとにお寺の良さを勧め、仏さまとのご縁作りを続けてきました。私がそれについて「素晴らしいですね!」と声をかけますと、「これは私にできる精一杯のご恩返しなんです」と謙虚にお答えになります。

Kさんご夫妻は、自営業という先の見えない、いわば「無常の風」が吹きすさぶ中で、唯一グラつかない柱とも言うべき御題目を軸としながら、前へ前へと進んで行かれているように見えます。無常の世の中だからこそ、その逆の常なる存在とつながり、しっかりと自分の足場を持つておられる方の強みを垣間見たと思います。

本門佛立宗を開かれた長松清風(日扇聖人)

は次のような教え歌を遺しておられます。

〓長旅は日和ばかりと思ふなよ 雨ふりもあり山坂もあり
(現代語訳…人生の長い旅路はおだやかな天気ばかりと思っではいけない。雨降りもあり、急な山坂もあるぞ)

晴れのお天気ばかりを当てにするより、最初から雨降りや山坂もあると覚悟できる人。悪条件が重なっても、その中で自分にできることを粛々と努力できる人。その心の中心には最高・最強の柱が必要なのです。

小林信翠／光薫寺住職

昭和四十六年生まれ

平成二十七年より

光薫寺住職としてご奉公中

趣味はマラソン

